

研究ノート

道徳の教材研究： 文部科学省道徳教材「およげない りすさん」

A Study of the Moral Material 「Oyogenai Risusan」

堀 田 泰 永*・三 友 郁**・荒 木 紀 幸***
Yasunaga Horita, Kaoru Mitutomo, and Noriyuki Araki

キーワード：信頼・友情、考える道徳・議論する道徳、読み物教材、認知的不均衡、モラルジレンマ、道徳的
感受性

1. はじめに

文部科学省教材「およげない りすさん」は、みんなで仲良く遊ぶという「信頼・友情」をねらいとする教材であるが、私たちは安全面で問題がある教材と考える。その点を補完するために補助教材を作成し、文部科学省教材と併せた新しいアプローチの授業提案を行ったのが、『考える道徳を創る「私たちの道徳」教材別ワークシート集』1. 2年編、堀田泰永「⑩およげないりすさん」（荒木・堀田・棚澤・松本編、2015）である。その概要は以下である（84-85頁）。

「およげないりす」と補助教材－資料は、あひる、かめ、白鳥が、池の中の島へ連れて行って遊ぶ相談をしている時、りすがやって来る。島へ一緒に行きたいというりすに、かめが「泳げないからだめ。」と言い、りすだけを残して3ひきで遊びにってしまう。島で遊ぶうちに、「りすさんもいたほうがいい。」という思いになり、次の日、かめが「ぼくのせなかにのりなさいよ。」と言って4ひきで島へ遊びに行くという話である。友だちのことを思い、助け合ってみんなで楽しく遊ぶという点では、子どもたちの日常によく見られることであるが、問題点もある。それは、泳げないりすをかめの背中に乗せて島へ連れて行き、連れて帰って来るという点である。危険な場所で遊ぶことは、子どもたちにはありがちなことで、学校では日々、危険な遊び場所を洗い出し、行かないように指導している現状もある。そう考えると、この資料で、かめが泳げないりすを背中に乗せて島へ連れて行くのがよいのか、他に楽しく遊ぶ方法はないのか、今一度

考える必要がある。

これは、「わたしたちの道徳1・2年」の「ぽんたとかんた」の内容にも関わることである。そこで、本資料の活用にあたっては、資料の後半部分で、りすが行くことができないのなら、島へ行くのをやめ、池のほとりで4ひきで一緒に遊ぶという場面を設定し、児童に、島へ行くのと行かないのでは、どちらが4ひきにとってよいか選択させ、その理由を話し合わせることにする。

（補助資料）つぎの日、りすさんが、池のほとりへ行ってみると、みんなが あそんで いました。「りすさん、きのうは ごめんね。」「きのうは、りすさんがいなくて あそんでいても さみしかったよ。」白鳥さんと あひるさんが 言いました。かめさんは、「りすさん、りすさんは およげないから しまへは行けないよ。あぶないからね。だから ぼくたちもう行かない。ここでいっしょにあそぼう。」と、声をかけました。りすさんは、にこにこしながら みんなと いっしょに 池の まわりで あそびました。

2. 堀田泰永提案の授業展開に対する質問

この提案に対して、次のような疑問が現場の授業者、三友郁から寄せられた。それは、補助教材を追加することで、文部科学省資料は「節度・節制」をねらいとする資料となって、「信頼・友情」の授業にならないのではいかという疑問である。このことについて私たちは次の

* 石川県宝達清水町立相見小学校

** 埼玉県伊奈町立南小学校

*** 兵庫教育大学名誉教授

ように、「およげないりすさん」の授業を考えてきた。この点についてこの授業展開の提案者の堀田の考えは次のようである。

これまで長年行われてきた道徳の指導法の考え方では、1時間の授業で資料を通して中心価値についてのみ考えさせることが重視され、関連価値については、深く考えさせることを避けてきた。このことが中心価値に関わるねらいを達成するため、学習過程・発問が考えられてきた。このため授業が中心価値からそれ、関連価値についての発言が多くなったときには、今日の授業は「信頼・友情」ではなく、「節度・節制」になったのではないかと、授業整理会で批判されてきた。指摘のように、補助資料を追加し、「どちらの方がよかったと思うか。」と問うことは、これまで長年行われてきた指導法の考え方からすれば、「節度・節制」をねらいとする資料となつて、「信頼・友情」の授業にならないということになるのかもしれない。

しかし、平成28年7月22日に出された道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議の「特別の教科 道徳の指導方法・評価等について」（報告）では、これまでの道徳の指導方法がもつ課題の一つに、「ねらいは、一つの授業で一つであることが望ましい」という指導が行われていたことだと書かれている。更に道徳教育の質的転換を求めて、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考えることを強調し、特定の価値観を押し付けたり主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることを避け、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢が重要だとしている。

そもそも現実の生活で、「信頼・友情」は、単独で存在するものではない。「信頼・友情」には、A1「善悪の判断」、A2「正直、誠実」、A3「節度、節制」、B6「親切、思いやり」、B7「感謝」、B10「相互理解、寛容」等の内容項目が関連する。これは他の内容項目でも同じである。「およげないりすさん」は、いわゆる定番資料である。定番資料とは、誰が授業を行っても中心価値について焦点化して考え、発言させることができる、扱いやすい資料である。このまま従来型の授業を行うと、「信頼・友情」と「親切、思いやり」程度の中でこの問題について子どもたちは考えることとなる。これでは、上述した専門家会議の報告が指摘した「道徳教育の質的転換」を図ることはできない。

一方、補助資料を活用し、「どちらの方がよいか。」を問うことで、子どもたちは、次のように考えることが可能となる。

- 「島へ行く」 りすさん一人じゃかわいそうだから、すべり台やぶらんこがあって楽しいから（りすさんにもさせてあげたいから）。
- 「島へ行かない」 りすさんは泳げないので危ないから、行かなくてもみんなで遊べば楽しいから。

このように、りすさんのことを考えて、「親切、思いやり」「節度、節制」という周辺価値を通して「信頼・友情」について多面的・多角的に考えることができる。

授業では、この後、まず、どちらもりすさんのことを思って「信頼・友情」の観点から考えていることを認めることが大切である。「どちらもりすさんのことを考えていますね。」と、板書で示せばよい。

最後に、これは、モラルジレンマ授業ではないのだから、判断形式（理由）も大事であるが、判断内容（どちらを選ぶか）も大切である。それは、子どもたちは、往々にして友だちとの遊び・楽しみから、危険を冒してしまふことがあるからである。そこで、次のような問いを子ども達に投げかける。

○友だちとして、本当にりすさんのことを考えているのはどっちかな。それはなぜ？

■「もし皆さんがりすだったらどちらが嬉しいですか？」の発問について

○「島へ行く」 みんなと遊べるから、すべり台やぶらんこで遊べるから、かめさんが背中にのせてくれるから、等。

○「島へ行かない」 みんなと遊べるから、危ないとみんなが心配してくれているから（この意見が出てくる可能性は低いと考える）、等。

この発問だと、やはり「島へ行く」楽しみがクローズアップされ、島へ行かないことにしたみんなの思いについて考えにくいと思われる。

これまでの「価値の押しつけ」や「心情主義」に立った道徳からの転換、「考える道徳・議論する道徳」の構築を念頭にした授業が、今回の補助教材を加えた授業であるという説明が授業提案者、堀田の説明である。編集者の一人、荒木の考えもまた堀田と同じ視点に立った考え方である。このため重複するところがあるが、授業作りの参考のために、荒木の考えを以下に示す。

文部科学省作成の「およげないりすさん」は、みんなで仲良く遊ぶという「友情・信頼」をねらいとした教材としてよく使われる教材であるが、思いやり・親切をねらいとして使われる場合もある。このお話の中で、特に目を引くところは、一人で寂しい思いをした「泳げないりすさん」を、遊び仲間のかめが背中に乗せて島に連れて行くという発想を描いているところで、みんなで楽しく遊ぶための問題解決策になっているところである。これが話をおもしろくさせているといえる。

しかしながら、この問題解決策になっている「子どものかめが、泳げないりすさんを背中に乗せて島に連れて行き、また連れて帰る」という行為には、視点を変えてみると教育上安全面で問題を含んでいる。そう考えた堀田は、その問題も含めて、子どもたちが安全に気をつけてみんなで楽しく遊ぶためにはどうすればよいかをしつかり考えさせたいと考えたのである。そのために、もうひとつのお話を補助教材として用意した。そして、ど

らの行為の方がよいかをオープンな形で問う授業展開とした。したがって、この授業はモラルジレンマ授業を厳格に追った授業といえない。

命が危険になるかもしれないという問題に気がつかなければ、あるいは池に渡ることを危険だと思わなければ、りすも一緒に島でみんなで楽しく遊ぶことを選ぶだろう。それは文部科学省資料が示しているところである。

しかし、危険を察知すれば話は別で、島には行かないで、いつものところでみんなで遊ぶことを選ぶようになるのだろう。このとき、アヒル、白鳥、かめ、りすの4匹はそれぞれに島での遊びを諦めている。その点で「節度・節制」が働くことが考えられる。

ところで、アヒル、白鳥、かめは、前日の島での遊びをどう感じていたのであろうか？「島には、すべり台やブランコがあった。しかし、遊んでいても少しも楽しくない。やっぱり、りすさんがいた方がいいね」と言っている。「りすさんを欠いた遊びはつまらない。みんなで遊びたい」とみんなで遊ぶことが強調されている。また、りすにとって「泳げないから、ダメ」と言われたので、島に行ってみたい気持ちがあるが、島には行けないと諦めている。では残りの3匹の場合どうであろう。3匹は島へはいつでも渡ることができるので、みんなで楽しく遊べない島には行かないと決断するのはさほど難しいことでなく、負担（節度・節制）となるようなことでもないのである。こう考えると3匹が、泳げないりすさんのことを考えて、みんなで楽しく遊べるいつものところを選ぶのはごく自然な成り行きと言えるのである。このように、補助資料を加えることで、問題の修正ができ、ねらい（信頼・友情）に沿って考える授業を展開できると考える。

ところで、教材のもつ道徳的な問題や問題点にいち早く気づく力のことを道徳的感受性（感性）といい、私たちは特にこの力を大切にしている。モラルジレンマ授業を重ねる中で、子どもたちも、先生方もこの道徳的感受性を高めていく。多くの人には気づかれない道徳的にみて少しの変化でも、その変化を察知し、道徳的に変だと見なすことのできる力は大切にしたいのである。私たちはまたこの力が、考える道徳、多面的に、多角的に思考する力、批判的に見る力と連動していると考えている。道徳的感性は均衡化理論の考えから来ている。私たちが対峙している世界に道徳的な不均衡やズレ（変化）を感じない限り問題は見過ごされる。変化が意識化されて始めて道徳的な問題となる。今回、補助教材の中に「節度・節制」を見つけ、「信頼・友情」の授業にならない、変だと感じられたのは、道徳的感性を刺激されたからだと考える。この指摘により教材の適合性を改めて検討できたことに感謝する次第である。

確かに、3匹が島での遊びにこだわっている限り、島に行かない決断には「節度・節制」が強く係わってくるが、そこまでのこだわりは3匹になかったと考える。そ

の当たりの教材解釈の違いが疑問に発展したのかもしれない。私は、3匹はりすさんも交えてみんなで遊びたい気持ちが大きく、島に行くことにそれほど固執やこだわりはないと考える。

ただ、補助教材のみを示された場合には、「あぶないからね。だから僕たちもう行かない」というかめさんのせりふから、「節度・節制」を強く意識することが考えられる。

本道徳教材の概要の中で書かれているように、「危険な場所で遊ぶことは、子どもたちにはありがちなことで、学校では日々危険な場所を洗いだし、行かないように指導している」という堀田の現状認識は大切にしたいと考える。不注意による海や川や池の事故死は、今年も繰り返し報道されている。今回の教材でも命の教育に貢献できればと考える。

3. 堀田の「およげないりすさん」指導案による三友郁の授業実践（2年生対象）と子ども達の反応の概要

①「友だちっていいなと思うのはどんな時？」

→手つだってもらった時、一緒に遊んでくれた時といった意見が出ました。

②資料を読む。

→読みながら挿絵を貼る。（2通り目の資料も読む）

③自分が、りすさんだとしたら、どちらが良いか？

（1）島へ行った方がよかった。

（2）島へ行かない方がよかった。

④選択させて、理由を書く。

→島へ行った方がよかった：楽しいから、やりたい遊びだから。

→島へ行かない方がよかった：あぶないから。

⑤班で話し合いをする。

→私のクラスでは、これまでも生活班で司会者を決めて話し合いをしてきました（少人数ですので、意見も言いやすいと考えてのことです）。

⑥全体での話し合い（司会者はいません。生活班での話し合いの後で、全体に広げました）。

私が、それぞれの意見を聞いて行きました。

→島へ行かない方が良いの意見（12名）：「おぼれたら大変」

→島へ行った方が良いの意見（19名）：「助ければよい。」

「水の深さは浅いかもしいない。」「泳げる生き物がいるのだから、助けられる。」

と言った感じでした。しかし、水の深さについては分かるはずもないのに、子どもたち同士で相手に質問が出るなど、私が指名しなくてもどんどん発言し始め、水掛け論のような形態になっていきました。

「水が浅いかもしいないから、泳げるかめさんが助ければよい」とか「そんなの分からない、深かったらどうするの？」などです。担任である私が上手くさばけず反

省点が残りました。

⑦感想発表

→危険なことはいけないので、友達のことを考えているのは行かない方だと思う。

→自分だったら、楽しい方が良い。etc…

⑧最後の説話

「どちらもりすさんの事を考えているんだよ。どちらが悪いということではないよ。例えば、クラスでもドッチボールが苦手な子がいたらルールを工夫するとか色々と考えてくれる人がいます。友達のためにあれこれ考えてあげることが大切なんですね。」と言った話をしました。

4. 堀田による終末部の新たな授業提案

堀田提案（2015年）の「およげないりすさん」の授業展開の終末では、「どちらも楽しそうでしたよね。皆さんは、どちらの方がよかったと思いますか。」と発問し、その後、感想をワークシートに書かせ、発表の時間をとり授業を終了します。今回、三友実践を受け、堀田は判断内容（島へ行かない方が良い）について更に考えさせることが必要だと、次の3つの方法を提案した。それは、子どもたちは、往々にして友だちとの遊び・楽しみから、危険を冒してしまうことがあると考えられるからである。

①結果を類推させる

○もし、りすさんがかめさんの背中から落ちたらどうなるの？

- ・みんなで助ける。→絶対助けられる？→分からない。
- ・川が浅いかもしれないからだいじょうぶ。→本当に浅いの？→深いかもしれない。
- ・りすさんがおぼれる。
- ・死ぬかもしれない。

○そうだね。友だちとして、そんな危険なことをするのはよくないね。島へ行かなくても、りすさんも楽しめる方法はないかな？

- ・島へ行かない。みんなで鬼ごっこをして遊ぶ。

Etc.

○りすさんもこれで喜ぶね。

②りすさんへの役割取得を促す

○川は浅いか深いか分からないし、助けられるかどうか分からない。島へ行ったら楽しいと思うけど、危険はある。だからみんなの意見が分かれたんだね。

○りすさんはどう思っているの？島へ行きたいの？みんなと遊びたいの？どっちの思いが強いのかを聞くことで、みんなと遊びたいという思いが強いという反応が多くなると思います。）

- ・みんなと遊びたい気持ちが強いと思う。

○島へ行かなくても、みんなで楽しく遊ぶ方法はないかな？

- ・みんなで鬼ごっこをして遊ぶ。Etc.

○りすさんもこれで喜ぶね。

③教師の考えを提示する

特に低学年の場合は、教師・大人の判断を示し、それについて考えさせることも重要だと思います。

○「島へ行く」「島へいかない」どちらもりすさんのことを考えていると思います。でも、先生は、「島へ行ってほしくない」と思います。なぜだと思いますか？

- ・危ないから。
- ・りすさんがかめさんの背中から落ちたらおぼれるから。Etc.

○島へ行かなくても、りすさんも楽しめる方法はないかな？

- ・みんなで鬼ごっこをして遊ぶ。Etc.

○りすさんもこれで喜ぶね。

引用文献

荒木紀幸・堀田泰永・榎澤実・松本朗編（2015）『考える道徳を創る「私たちの道徳」教材別ワークシート集』1・2年編 明治図書 Pp.84-89.

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（2016）特別の教科 道徳の指導方法・評価等について」（報告）